



TITLE:

心學に就て(二、完)

AUTHOR(S):

瀧本, 誠一

CITATION:

瀧本, 誠一. 心學に就て(二、完). 經濟論叢 1919, 8(3): 364-373

ISSUE DATE:

1919-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/127501>

RIGHT:

心學に就て (三、完)

灌本誠

(三) 梅巖の講談の方法及同派の重立たる心學者

純乎たる學說上より之を評すれば石田梅巖を以て日本心學の開祖などと唱ふるは、勿論誤謬の甚たしきものである、又單に斯學の解釋者の一人としても、彼か以前に、より以上の解釋をなしより以上の著作を公にしたるものは鮮ないのである故に此の點より之を見れば梅巖は心學中興の先驅者の一人たるに過ぎざるのであつて、學說史上には左まで重きを爲すに足らざるも、彼か特に新に生面を開きたるは其の講談の方法である、彼れは從來の學者が皆武家武人若くは凡袴子弟の爲めに鹿爪らしき講釋を事としたるに反し、一般平民階級殊に町人の子弟婦女子を相手にして彼等に人の人たる道を通俗的に教ふるの方法を取りたるのであつて、我々經濟學者が此の心學に付き特に注目を要するは矢張り其講談の方法に外ならざるのである、梅巖が當時一般に行はれつつあつた慣例に逆つて特に町人の教化に重きを置くの必要を感じたる動機は果して何事なりしや之を詳にするに由なしと雖も、彼か心學の講談を始め「何月何日より心學開講、無縁のかたかたにても遠慮なく聽かるべし」云々の廣告を張出したるは、享保十四年のことであつて、此の頃は町人の勢力漸次勃興し來り、武家武人は表面彼等に對して、輕蔑の態度を示しつつ其の實は陰に

町人に依頼して其の財政の整理を托するなどの状況となり、之と同時に町人の風規大に紊し、殊に三都の富商等は競つて豪奢を肆まにして、徳川氏初代に於ける純朴の風、地を掃つて見るべくもあらざりしかば、梅巖が此の時を利用して専ら町人を相手に倫理道德を講説したるは、能く其の機宜に適したりと云はざる可らず、彼が心學の開講を思付きたる當初は自ら其の成功を疑ひ、若し聽く者が無ければ辻立ちしてもやる積りであつたと云ふことを自白して居つた由なれども意外にも彼が講談は非常に大繁昌であつて、講席は何時も満場立錫の地もなしと云ふ大入であつて梅巖先生の名遠近に轟きたるは一つには無料聽講と云ふことに依りしなるべく、又一つには平民階級の學問沙汰は假武以來始めての事なれば、半ば好奇心に驅られて出掛けたるものなども多かりし爲めなるべきも、畢竟時勢の要求が町人の教化を必要としたるにあらざれば、斯くの如き成功を見ることが能はざりしや明かである、殊に梅巖の講談は町人が主なる目的なれば、主人か雇人に對する取扱振の事、雇人が主人に對する心得方の事、節儉に重きを置く事、家職を勵むべき事等の論題が日々の講談の要目なるも、之を説明するには、夫の普通の儒者の如く小六つかしき學理などを主とせず、専ら孝子貞婦等の事實談、例へば武藏國の薪木屋長五郎と云へる孝子の傳とか或は越後出雲崎の大工作太夫の女房某の貞操話などを持出して、童幼婦女子に分り易く、面白可笑しく、説教的に講説したれば、滿堂の聽者は少しも惰氣を催すことなく、皆神妙に聽き居たりと云ふ、梅巖は其の聽者に對しては餘程細微のことにまで注目し居たるものと見へ、彼が講壇に上るときは、學者顔で威張つて袴などを着用することなく、づらりと着流しのまま席に就

きたる由なるが、それは自分から袴などを着けて四角ばるときは町人等が窮窶がつて來らぬが故なりと云ふのである是れ亦た彼が講席の繁昌なりし一原因なるか。

梅巖の門人手島堵庵の編輯したる心學派の規約書に依れば梅巖の著書都鄙問答及齊家論の二書は大學、中庸、論語、孟子、近思錄、小學の六書、と合せ共に八書として、心學者の必讀すべき重要な書とせられて居るのである、都鄙問答は大體宋儒の性理論を説きて三教一致論に及び「佛は覺なり一切衆生の迷を解るなり、迷ひ解れば本に歸る、故に三界唯一心と云ふ。其の迷の解けたる體を名付けて佛性と云ふ。佛性は天地人の體なり、至極の所は性を知る外に佛法あらんや」と云ひ、又「儒には道の大原は天に出つ、依て天の命これを性と云ふ、性に卒ふは人の道也と説き玉ふ性と云ふも天地の體なり、神儒佛ともに悟る心は一なり、何れの法にて得るとも皆我心を得る也」と説きたるは藤樹等と少しも異なる所なし、同書は其外に於ては商人として心得べき件々を述べ、徳義を重む信實を守り、商品を偽らず、惡しきものを賣らざる様にし、多くの利を貪らざることを戒めたるなど、皆月並の教訓に過ぎず、齊家論は徹頭徹尾、例の儉約論にして、別に奇論もなければ新説もなしと雖も、之を小にしては身を修め家を齊へ、之を大にしては國を治め天下を平にすること皆此の儉約に歸すると云ふ舊説を問答體に述べたるものであつて、之が大學以下の六書に次ぐ經典として、心學者の尊重する所である。

梅巖の門人は手島堵庵の外に齋藤全門、富岡以直、木村重光等あり、堵庵は知心辨疑、理學津梁、我津衛、町人身體なほし、明德和贊其他數十部の著作あり、何れも心學の旨趣を述べ、同時

23) 齊家論下卷に此事を記せり
24) 安永二年に會稱して出版す天明八年改めて會友大旨と題し堵庵の講義旨趣及邪正の辨と云ふ文を附加して再版せり
25) 朱熹及呂祖謙の共著にして道學の淵源を詳にす
26) 朱子門人劉澄の撰

に儒家に鎌田柳泓あり心學五則、心學拔萃、心の花實、道の筈、商家因草等數十部を著して、盛に石門の學を鼓吹せり、又少しく後れて薩埵德軒あり（道話二卷あり又講義錄百餘卷ありと云）德軒の門人に柴田鳩翁あり（道話十八卷あり）又堵庵の門人なる脇坂義堂及中澤道二の二人は、師の衣鉢を受けて頻りに斯學の宣傳に勉め、義堂は心學教論錄、民の繁榮、教の小槌、金もうかる傳授、御世の恩澤等數多の著作を公にし、道二翁道話は凡て六編あり、皆頗ふる通俗的に石門の心學を説きたるものである、堵庵の男和庵及其弟淇水（上河）は共に漢學に長するも、同じく家學に従事して道學を唱道し、又同時に岡田南涯（岩垣月洲の父）源中所（五倫談）中村弘毅（新齋と號す道の梁の著者）堤正敏（商道九篇の著者）等の人々あり、何れも京都の儒者にして卑近の心學を講説したのである、堵庵が江戸に講席を開きたる以來斯學東漸の端緒を開きたるも、京阪地方に比すれば其勢力甚た微弱にして、而かも多くは鄙俗なる講談にして取るに足らざりしかども、其の中小町雄八（玉川と號す）の如きは鷄群の一鶴にして、立派な心學者であつたのである、玉川は文化文政年間江戸及両總の間に往來して、斯學を講説し、著書數十部ある由なるが、其の重なるもの道話自修編三卷は、文政十一年に出版せられ、龜田綾瀨其他の名士序跋を作つて之を稱揚せり、其他此に特記する程の有力家もあらざりしが如し。

梅巖は元來小栗了雲（號は賣炭翁）と云へる釋氏の門人にして、其の説固より佛説に近かりしかば、彼が門人中にも亦桑門の徒少なしとなさず、就中其の最も聞へたるものは慈音（兼叟と號す）と稱する尼僧にして、此の人は梅巖に私淑して、深く心學の旨に通し、著作も數多なりしが、其中

29) 陸象山及王陽明の學説を其の諸書より抜萃したるものなり
30) 性理學を修め老莊の學に長し享保十四年歳六十にして歿す

主なるものは道得問答である、本書は安永三年の出版であつて其の表紙裏に「此書は石田先生教訓ありし三教、其つづまる所の要を説解す、士農工商各誠の道にもとづく便なるべし」と廣告しあるを見れば、これにて本書の内容の一斑を想像するに足るべし、慈音尼の外釋氏にして、石門の學を宣傳するもの二三に止まらざるも、今は總て之を省略して記さず。

さてそこで如上梅巖以下の心學者は如何なる論法、如何なる口調に依つて六つかしき宋儒の道學、即ち性理學の主旨を通俗的に講談したかと云ふに、茲に其の重要な標的の語を掲げて、其の説き方を例示すれば先つ持敬、中和、誠意、推讓、耐忍、天命などの語を解釋して之を通俗卑近の事實に應用するのであつて、即ち持敬を説くには慎み謹んで坐臥進退に油斷なく、商工の事業には怠りなく、主人は使用人を慈くしみ使用人は主人に忠實なしと訓戒し、中和には人々柔和にして物事に争ふことなく、主従父母夫婦兄弟皆和合して働くべしと勧め、商家の丁稚小僧などは皆協同一致して勉強すべしと述べ、誠意は正心誠意を旨とし、商人なれば商品を偽はらず、利益を薄くし得意を大切にすべしと教へ、推讓には皆々相互に譲り合つて競争することを避け、人には多くを與へて、己れは少なきを取るべしと云ひ、圍碁に十目を損して、十一目を得るの法あることなどを示し、耐忍には忍の一字は衆妙の門などと喩して、萬事の成功は忍の一字にあることを説き天命には生れ付きたる身分は其人の命と諦め、平生心を固く保つて、先祖傳來の家職を守るべしと勧告するの類であつて、之を講説するには「心學道話は識者の爲めに設けました事ではござりませぬただ御百姓や町人衆へ聖人の道をお知らせ申したい爲めでござる」と云ふ様なる調子

を以て、極めて分り易く且つ面白い和漢の事蹟を述べ、例へば堯舜文武周公の固苦しき説教が始まるかと思へば忽ちにして知識高僧の難行苦行談となり、忽ちにして楠公新田の忠義談となり、或は忠臣蔵の鹽谷判官が引出さるるかと思へば、又忽ちにしてお俊傳兵衛の情話となり、或は滑稽となり落噺となり、遂には辨財天の地に大黒32)か躍り布袋33)が舞出すと云ふ大騷を演して、満場を哄と絶倒せしむる中にしかと放心を求むるの要を教ふるのが心學の最も妙とする所である、然れども後世益々盛なるに及び、今日の寄席の如く一種の營利事業の如きものとなり、講師は隨て無學文盲の俗物が務め講談は愈々益々下品となつて、遂に心學の真相を失ふに至つたのである。

(四) 感化の範圍

此の學派が社會に及ぼしたる感化の範圍如何は確かに之を測定すること能はさるも前に述べたる數多の心學者が、此の京都を中心となし、近畿各地方并に江戸等の各講席に出て、毎月六回つつ位、無月謝講演をなし、盛に其の學說の宣傳を勉めたるは、洵に著明の事實である、手嶋一派の心學者が出版發行したる諸國舍號なるものあり、是れは其の出版の當時即ち寛政元年に現在諸國に設置しありたる同派の講席を列擧して其の所在町名及會日を示したるものなるが、此の時全國に於ける會席の數は既に五十五個所あり、其の後漸々増加して更らに何倍の多數に及ひたるや判然せざるも、近頃大阪の明誠舎と稱する心學會より發行したる心學起源なる小冊子を閲すれば、全國に於ける手嶋派の會席は百六十個所に達し居たりと云へり、若し果して然らんに之に

32) 堵庵は大黒を信心して常に其の功徳を説き
33) 義堂は布袋を尊重して屢々其の利益を述べ

加ふるに他の各派の心學會席及之に類する私塾の如きもので心學を講説し居たるものを合算すれば、全國に散在せる講席の數は餘程の大數に上りしものなるべしと思はる、加之ならず別に會席を設けて開講せざるも、其の著書に依て同學説を宣傳しつゝあつたものも、亦非常に多かつた様と思はるるのである、我輩は此の學派に對しては前記の如く學説の上に於て餘り重きを置かずしか故に、特に意を用ひて其の書籍の蒐集に勉めざりしと雖も、今現に我輩の文庫に存する心學書だけでも其の數既に二百數十部に上つて居るのである、而して此等心學書の奥書及各種の書目録を見れば、私藏に漏るる心學書はまだ非常に澤山にあつて、私藏のものは洵に其の一部分に過ぎざれば、彼等の著書が意外に、盛大に發賣されつゝあつたことは、疑ひなき事實なるが如し、然らば夫の講席の全國に涉りて多數なりし事と、此等著書の各地到る處に普及せる事などを綜合して之を推測すれば梅巖が享保十四年に始めて講席を開きし以來、徳川氏の末年まで凡一百八九十年間に於て、此の心學が一般平民階級に及ばしたる感化の勢力は決して鮮少に止まらざるを立證するに足らん。

且つ又當時町人の舊家には往々家憲とか家訓とか云ふ様なものあり、數種此等のものを檢索して閱讀すれば、家柄に依り商賈に依りて、勿論多少の差異なきにあらざるも、大抵其の主趣は心學の規範に則りて作成せられたかと思はるものが多いのである、現に其の中最も著明なるものは白木屋の番頭が寶曆四五年の頃、店員一同へ訓示したる演説覺書であつて、此の覺書は以來長く同店の教訓書として傳へられしのみならず、三都の大商店に於ては往々之を謄寫して、夫

れ夫れ其の字句を自店の業務に適應する様に修正し、以て各々其店の規範となしたる事實ありしが、其の原本たる白木屋の覺書は、全く心學の教訓書であつて、其の表題すら此の學派の常用語を採用して普通多くは獨愼俗語と稱せられて居るのである、但し白木屋の主人は心學の流を汲める碩儒三輪執齋の子孫なれば此の覺書は必ずしも石門心學の勢力に淵源するものとは斷言すべからざるも、兎に角斯學の商家に及ぼしたる感化力の大なりしことを證明するの一事實とせらるであらう。

我輩は今茲に此篇を終らんとするに臨み、更らに一言の勞を取らざる可らざることは、此の心學が全く他の方面に向ひ他の形式に依つて、非常の大感化を及ぼしたりと推定さるる一事實である、それは外の事ではない、二宮尊徳の報徳主義である、報徳主義の根本思想が心學の教理と殆ど同一なることは尊徳の言及其門人等の説に徴して明白なりとす、即ち其の一二の點を示せば尊徳の教の淵源は、心學のそれと同じく、舜か禹に告ぐるの言に基づいたのであつて、人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執厥中一の聖語が其の根本である、尊徳は之を以て千古の金言となし、更らに之を説明して「儒者の如く講じては今日何の用にも立たぬ故に今汝等が爲めに分り安く讀て聞さん支那の咄しと思て迂濶に聞かす能く肝に銘せよ」云々と斷つて、人心惟危以下の句を詳に講釋したる所は、少しも心學者の言葉に違はないのである（尊徳夜話卷之二を見るべし）又天地間の眞理即ち四時行れ、百物成るの眞理を見るには、肉眼を閉ち心眼を開きて見るべしと云ひ、又我道は人々の心の荒蕪を開くを本意とす、心の荒蕪一人開る時は地の荒蕪は何萬町あるも憂るに

34) 大阪天満の管廟文庫本は白木屋管店書と題す

35) 日本經濟叢書卷十七の解題中に詳記せり

足らざる故なり云々と云ひ、又大學に明德を明にするにありと云ふは心の開拓を云ふ云々と云ひ又推讓の意味を説明して、予は人に教ふるに百石の者は五十石千石の者は五百石惣て其半にて生活を立て其半を讓るべしと教ふ、分限に依つて其中とする所各々異なればなり、是允に其中を執れと云へるに基けるなり、我か教是を推讓の道と云則人道の極なり云々(以上夜話卷之二)と云ふか如きは、全く心學者の云ふ所に異ならざるのである、又彼か言に「神道は開國の道なり儒學は治國の道なり佛教は治心の道なり故に予は高尚を尊はす卑近を厭はす此三道の正味のみを取つて人界無上の教を立つ、是を報德教と云ふ戲に名付けて神儒佛正味一粒丸と云ふ其功能の廣大なること舉て數ふべからず」云々と云ふに至ては其の三教一致の主趣と云ひ、説明の仕方と云ひ全然心學者流の言に符合し、殊に其の教訓を賣藥に假托して、功能の著るしきを説けるか如きは堵菴義堂の徒が出板せる心學書の奥付に往々廣告しある戲文と少しも異なる所なし、そののみならず尊德の道歌は心學の道歌と其の主趣同一である、二宮翁道歌集のはしかきに門人福住正兄が記したる一節に「道の心を發揮せんがため云々、又道の心を貫くを主とす云々等の言あり、又「いにしへの白きをおもいせんたくのかへす」もかへす」もと云ふ歌の解に「是も性理をよまれし也本來人の性は善にして初て性を受け得たる時は汚なく濁なき物なれば……返へす」も私欲邪念を洗ひそそぎ捨て清くいさぎよく清淨潔白にせよとさとされしなり云々の言を見れば愈々以て心學の真相を發揮したるものと云ふべし。

明の衰了凡と云ふ人は陰陽錄なるものを著はし、天命は一定不易のものなれども、人々の心懸

けと其の行とに依つて、短命にも長命にも、どうでもなると云ふことを、自分の小兒等に教訓したのであるが、此の陰騭錄は心學者が立命の學と稱して常に引證する所である、然るに報德學の宣傳者なる福住正兄の著はしたる報德學幽顯論なるものは、此の陰騭錄の主意を敷衍祖述したものであつて、其書(幽顯論)の末尾には陰騭錄の全文を譯載し居る位である、是れ亦報德學か心學と其の源流を同くする一證にあらずや。

加之ならず元來報德の二字は心學者の所謂る天地人三才の德に報ゆると云ふ意義に出てたるものにして、報德學の開祖と仰かるる二宮尊德の名字も亦朱子の心學錄にある此學(心學)以下尊德性、求_レ放心爲_レ本の語に基づきたるものにあらざるかと思はるるのである、何れにしても報德學と心學とは、其の講談の方面を異にして、一方は主として町人を相手にし、一方は専ら農民を相手にするの差異ありと雖も、其の説く所の教理は全然同一なりと云ふも決して失當の言にあらずべしと信ず、我輩の推定に依れば報德學は直に石門の心學より出てたるものとは認め難きも、陰然間接に廣き意味に於ける心學の勢力に感化せられて起りたるものなるや疑なしと思惟するのである、岡田淡山氏曾て曰く昔し藤樹先生江西に居り教化馬丁に及ぶと聞く、後世より之を見れば報德の感化、蓋亦是より盛なるものあらんと、何ぞ知らん自家の報德の教は、日本心學の淵源たる江西の教學と其の學脉を同ふするものならんとは、茲に鄙見の一端を記して識者の明鑑を仰く。